校長室だより～燦燦～ №９８１

説明力

2024.2.25

物欲がない。特に欲しいものがない。以前なら、あれも欲しい、これも欲しいということがあった。欲しいものを探し、いくつものお店を歩き、なかなかお目当てのものが見つからないということがよくあった。満足はしていないが、妥協して購入する。すると、しばらくして目の前にお目当てのものが現れるということもあった。買い物はむずかしい。

説明力が欲しい。人前でわかりやすく説明する力である。授業を行う教員には、説明力が絶対条件である。わかりやすい授業、わかる授業の成否は、説明力に左右されると言っても過言ではないだろう。

明らかに、わかりやすく話す教員がいる。そういった教員を観察し、分析してみると、ある共通点が浮かんでくる。明るい。笑顔が多い。声が通る。ここまでは、話す内容には直接は関わらない要素である。だが、重要なことである。文で話している。主語と述語がある。目的語もある。文脈のねじれがない。あれ、これ、そのなどの指示語が少ない。だから、話がスッと入ってくる。

一方、わかりにくい話も分析してみる。主語がない。これは、日本語の特徴でもある。わかっているだろうという主語が、意外と相手にはわかってもらえない。主語を間違えると、話がガラッと変わってしまう。述語の表現が曖昧である。日本語は、最後の述語まで聞かないと、意味が理解できない。指示語が多い。聞いていると、何を指しているのかがわからなくなるときがある。そして、文が長い。だらだらと文がつながっている。

人前で、わかりやすい話をする人は、いつもわかりやすい。前述のことがクリアできているからであろう。では、自分はどうなのか。説明が下手である。いつも落ち込む。生徒の前では、まだいいのだが、相手が大人になると説明力が下がる。大人の中でも、保護者や地域の方などはまだいい。先生方の前になると、どうもうまくいかない。毎回、それなりに努力してみるのだが、説明力は上がっていかない。これでは、校長としての役目に支障が出る。それで、困っている。

うまくいかないのは、きっと精神的なものに起因しているように思う。どうも言葉のセレクトがよくない。冴えがない。うまく話そうと意識しすぎているのかもしれない。そこで、リラックスして話し始める。すると、余計なことまで話してしまう。文と文がつながり、だらだらとした話になる。今のところ、改善の兆しがない。

このままでは不本意である。時間はあと一月しかない。起死回生の何かが欲しい。決してあきらめてはいない。説明力をつけたい。説明できる人間になりたい。説明できない自分が嫌である。説明力、それが今、一番欲しいものである。